

秋田市における都市の魅力度調査について

秋田大学 正会員 清水 浩志郎

秋田大学 学生員 京野 秀朗

岡 上 ○ 原 敬典

1. はじめに

魅力ある都市とはどんな都市であろうか。それは人間の持つ価値感がそれぞれ違うように異なった見解がでてくるであろう。しかし都市に住む市民の不満が解消されたとき、その都市は「住みよい」都市と呼ばれるようになり「ず」と住みたい」都市と呼ばれるようになるであろう。本研究ではアンケート調査によって住民の立場から「住みよさ」「定住希望」といった側面を中心に都市機能との関連を探り都市の魅力度をより具体的にとらえようとしたものである。対象地域は秋田中である。

2. アンケート調査方法

秋田市住民の1%を基準に回収地域が偏らないように行政区分に従い58ブロックに分けてランダムに回収した。その結果、秋田市民の約0.94%にあたる2548人(男:66%女:34%,10代(4.3%)20代(16.0%)30代(24.8%)40代(27.5%)50代(17.3%)60代(8.3%)70%(1.8%))の調査結果を得た。

3. 単紙集計結果

「住みよい」が全体で67.7%で、「住みにくい」が17.3%であった。一方定住希望については「住みたい」が、65.0%「よそへ移りたい」が18.2%であった。「よそへ移りたい」のうち55.0%が同じ都市へ移りたいと答えているので結局、75%の人が秋田市定住を望んでいることになる。さらに郊外部は78%と定住希望が多く、っている。住居に対する満足度は持家の比率が85.3%に比べて「満足」が51.4%、「不満」が46.5%となっており日本における住宅事情を物語っていると考えられる。教育については46.2%が「不十分」と答え、スポーツを楽しむ機会については41.0%が「楽しめない」と答えている。また繁華街については「楽しめない」が35.0%、演奏会や演劇を楽しむ機会については「不十分である」が59.0%と不満度が一番高かった。都市諸機能への不満はあるが定住への支障にならなとと考えている人が多いということか。天候の面では「住みよい」が46.1%「住みにくい」が23.1%「どちらともいえない」が30.2%となっており思ったより天候についてのハンディを意識していないようである。

4. クロス集計及び数量化理論第Ⅱ類による解析結果

表-1、表-2より「住みよい」「定住希望」は年令の増加にともなって、また

表-1

在住年数が長くなるほど割合を増していることがわかる。しかし「住みにくい」は在住年数が増えと若干減っているものの年令の差にはあまり関係なく感じられているようである。また「住みたい」が在住年数3年以上から急に増えていることから、「三年住めば都」といったことも考えられる。また「住みにくい」「移りたい」人の約70%が自分の住居に対して不満を持っていることがわかった。外的基準を「住みよさ」として数量化理論第Ⅱ類を用いて解析した結果が表-3である。ここでも住居への満足度が関係していることがわかる。

5. おわりに 都市機能と住民との関連は広範にわたっており、特に、本研究では交通機能との関連をとり扱わなかった。今後、都市諸施設とあわせて検討を進めたい。

秋田 在住年数	住みたい	移りたい	住みよい	住みにくい
3年以内	34.2 ^(%)	37.1 ^(%)	52.5 ^(%)	22.9 ^(%)
4～9年	50.3	24.7	60.8	22.5
10～19年	60.3	22.1	70.1	19.7
20年以上	75.0	12.7	71.5	14.7

秋田 在住年数	住みたい	移りたい	住みよい	住みにくい
10代	32.7 ^(%)	26.4 ^(%)	54.5 ^(%)	15.5 ^(%)
20代	51.4	20.1	65.6	15.7
30代	61.3	21.2	64.9	18.5
40代	67.0	20.3	67.7	20.0
50代	78.7	11.3	74.4	14.7
60代	79.7	11.3	71.2	15.1
70代	86.7	4.4	75.6	15.6

表-2

アイテム	RANGE
1. 住居への満足度	0.48010
2. 天候	0.39102
3. 定住希望	0.38909
4. 都市のきろく	0.35938
5. 繁華街	0.31161